

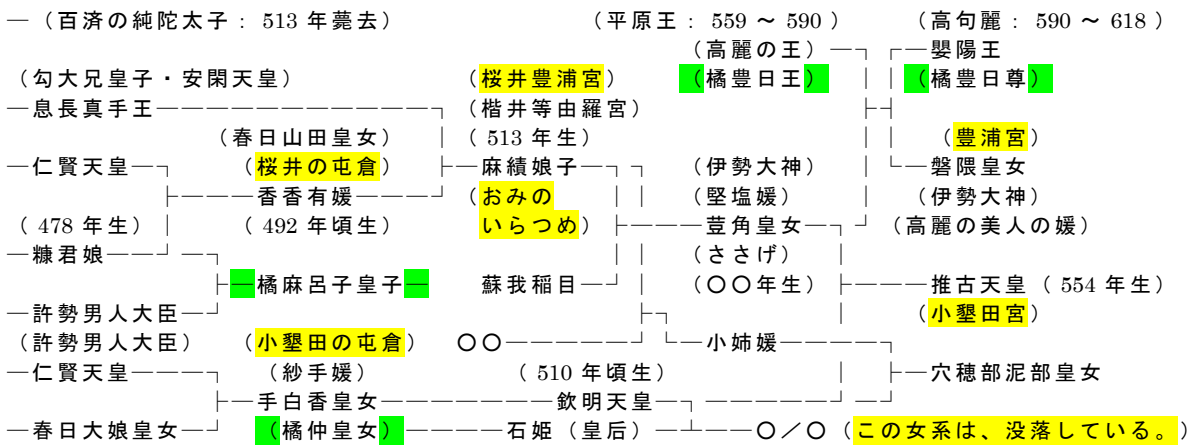
◎：「於等由羅（とゆら）宮治天下天皇」と「豊浦宮帝」についての考察（副題：「二人の聖徳太子」）
（「推古天皇」による、両親と「母方の祖母」の再評価と勢力拡大）（米田喜彦：2018-07-03）

※：「元興寺伽藍縁起并流記資財帳（がんこうじがらんえんぎ ならびに るきしざいちょう）」
—：楷井等由羅（とゆら）宮で天下を治めた豊御食炊屋姫命の生誕百年、癸酉（613年）正月九日に云々。
—：「炊屋姫命（513年生）の生誕百年」という記述は、正しいと（私は、）考えて考察しました。

Q：では、「楷井等由羅（とゆら）宮で天下を治めた豊御食炊屋姫命」とは、いったい誰でしょうか。
A：「豊御食炊屋姫命」を「大神の祠を祀って、食事を捧げる（祭祀権を持つ高齢の）女性」
—：（仮に「太皇太后」）と定義すると、堅塩媛の母親（の世代）が、「513年頃生」に該当します。

：楷井等由羅宮（桜井豊浦宮）で天下を治めた豊御食炊屋姫命（麻績娘子）の生誕百年（513年頃生）、
：癸酉（613年）正月九日に、厩戸豊聡耳皇子（聖徳太子）が天皇の命を受け、元興寺などの
：いわれと、豊御食炊屋姫命（推古天皇）の発願、ならびに諸臣たちの発願を記すものである。
（補足：日本書紀）：推古20年（612年）、皇太夫人の堅塩媛を、檜前の大陵〔欽明〕に改葬した。

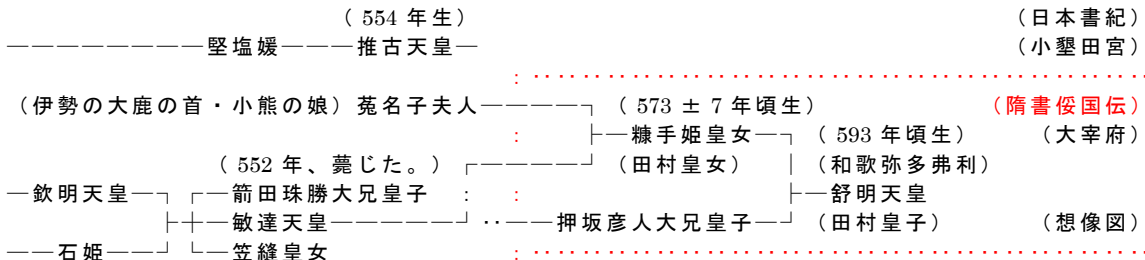
（「伊勢大神」を祀る女性の系譜の試作図）（『日本書紀』によると、桜井屯倉は、534年設置。）



『扶桑略記』 卷第三：欽明天皇、母皇后手白香。【又名橘仲皇女。仁賢天皇女也。】
『日本書紀』：「小墾田の屯倉」・大和国高市郷（飛鳥の辺）／／「小墾田宮」・高市郡飛鳥
（岩波文庫）：「桜井の屯倉」・河内国河内郡桜井郷／／「豊浦の宮」・高市郡明日香村豊浦

『日本書紀』繼体天皇紀：息長真手王の娘は、荳角皇女を生んだ。これは伊勢大神の祠に侍している。
『日本書紀』：552年、大臣は、向原（むくはら／小墾田）の家を喜捨して、寺（豊浦寺）とした。
：590年、学問尼たちが百済から戻ってきて、桜井寺（豊浦寺）に住んだ。

※：（隋書倭国伝）：開皇20年（600年）、倭王は、姓は阿每（あま）、字は多利思比孤である。
—：倭王の妻は、鷄弥（きみ）、太子を和歌弥多弗利（わかみたふり）と名づけている。



※：「豊御食炊屋姫命」を「大神の祠に、食事を捧げる（祭祀権を持つ高齢の）女性」と定義すると、
—：「推古天皇」は、（大王というよりも）「祭祀権を持つ高齢の女性」と考えることが出来ます。
※：つまり、日本書紀は、「推古天皇（554年生）」や「皇極天皇（594年生）」という場面では、
—：「大王（男王）」や「大后（女王）」の代わりに、「太皇太后」に近い形の、
—：「祭祀権を持つ高齢の女性」を「天皇」にしていることがわかります。（証明は出来ませんが、）
—：（自作の系図では、年代的・世代的に見て、「推古天皇」＝「菟名子夫人」に、しています。）

Q：「小墾田の宮」の主は、推古天皇である。では、「豊浦の宮」の主は、「聖徳太子」だろうか。

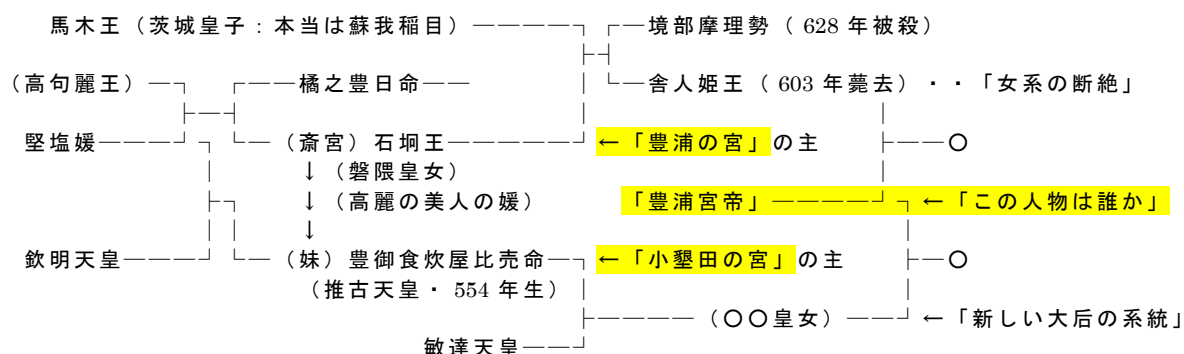
『日本書紀』・・崇峻5年（592年）、皇后（推古天皇：額田部皇女）は、豊浦の宮で天皇位に即位した。
・・推古11年（603年）、（舎人姫王が薨去した。）小墾田の宮に移った。
・・推古13年（605年）、皇太子は、斑鳩（いかるが）の宮に居（住）した。

『日本帝皇年代記』・・・壬子（592年）「豊浦宮帝」即位

『船氏王後墓誌』・・・・「於等由羅（とゆら）」宮治天下天皇に仕えた。

『古事記・推古天皇記』・・妹「豊御食炊屋比売命」は、小治田宮に座、天下治めたまふこと37歳なりき。

※：問題提起用の「仮の系図」（「日本書紀」＋「古事記」＋想像図）



- (その1)：「境部摩理勢」の生年を565年頃と考えると、母親は、「高麗の美人の媛」と考えられる。
- (その2)：「橋之豊日命」の男系（の続柄）は、高句麗王の続柄と良く似ている。
- (その3)：磐隈皇女を552年生とすると、15歳で、蘇我稲目（570年没）の子を産むことは可能である。
- (その4)：「舎人姫王」の薨去によって、「女系の祭祀権」が妹の「推古天皇」に移ったと考えました。

※：この仮説の系図（上図）を眺めると、「推古天皇は、豊浦の宮に居ない」という事が分かります。

—：ですから、「豊浦の宮」の主は、別の人物だとすると、「（齋宮）磐隈皇女」になります。

—：そして、男王としての「豊浦宮帝」は、歴史の表舞台から消えていることが分かります。

—：男王としての「豊浦宮帝」は、誰かと考える時、622年に亡くなった人物ではないか・・・。

※：『船氏王後墓誌』の紹介

『船氏王後墓誌』 「・・・首（おびと）之子也生
於乎婆陁（おさだ）宮治天下天皇之世奉仕
於等由羅（とゆら）宮治天下天皇之朝至
於阿須迦（あすか）宮治天下天皇之朝天皇照見知其才異仕有功勳・・・
於阿須迦（あすか）天皇之末歳次辛丑（641年）十二月三日庚寅故
戊辰年（668年）十二月殯葬於松岳山上共婦・・・」

【船王後墓誌とは】

船王後墓誌とは7世紀前半の官人船王後（ふねのおうご）の墓誌である。
現在までに発見されている墓誌の中では最古の紀年記載である。文字は鍛造の銅版の表裏に刻まれている。
江戸時代に現在の大阪府柏原市国分の松岡山から出土したと伝えられており、
その後長く西琳寺に蔵されていた。（現在は三井記念美術館蔵）
墓誌の正確な出土地点や埋納状況については全く不明である。

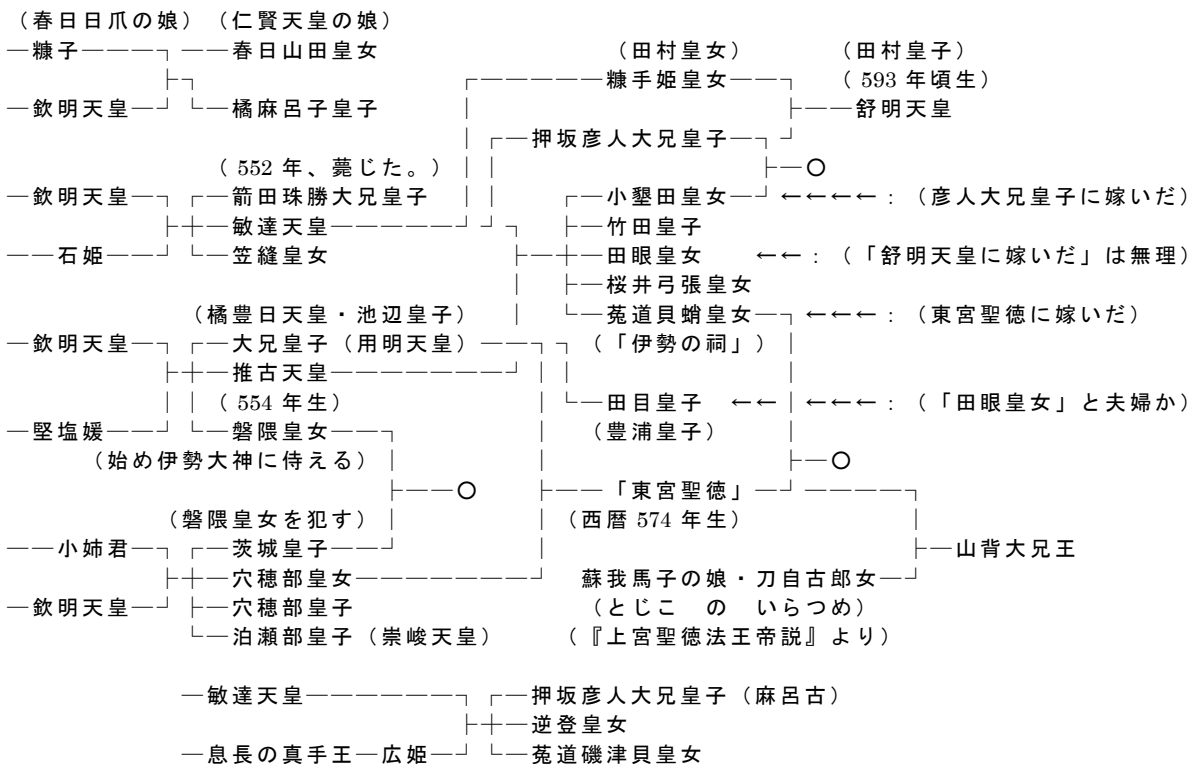
【船氏王後墓誌の現代訳】 （船史）（じんじ） （船首） 「—刀羅古
—王辰爾（しんじ） —船那沛故— —王後首（王乎：641年没）
（王智仁） （なほこ） —龍

「船氏王後首は王智仁首の孫、那沛故（なほこ）首（おびと）の子です。
おさだ宮治天下天皇の時に生まれ、とゆら宮治天下天皇に仕え、あすか宮治天下天皇の時には
すぐれた才能を認められ、冠位十二階の第三等にあたる「大仁」の位を賜りました。
そして辛丑年（641）12月3日に没しました。
その後、戊辰年（668）12月に松岳山上に埋葬しました。
夫人安理故能刀自と共に同じ墓に埋葬し、墓は兄の刀羅古首の墓と並んで作りました。
この地は永遠に神聖なる霊域であり、侵してはなりません。」

Q：『船氏王後墓誌』に出てくる「於等由羅（とゆら）宮治天下天皇」とは、誰か。

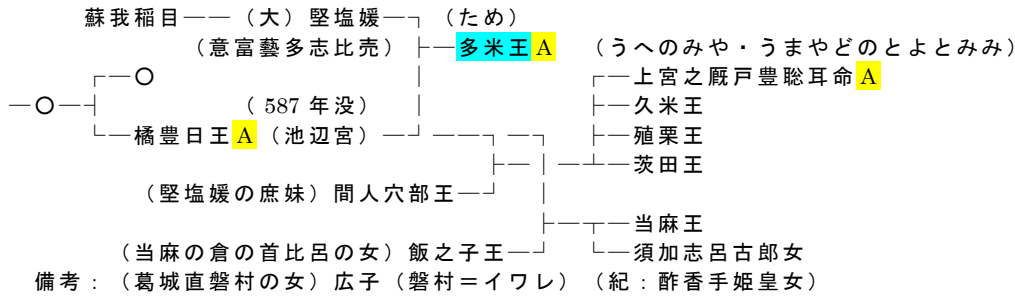
人物往来社：別冊歴史読本	『日本書紀』	『日本帝皇年代記』	『新唐書』
「古代天皇家の謎（1993年）」			「日本伝」
特別増刊（P-310）より「宮」	（〇〇太皇太后）	『船氏王後墓誌』	
敏達天皇元年（572年）百濟大井宮	敏達天皇	帝即位（34歳：539年生）	海達
4年（575年）詛語田幸玉宮（おさた）		乎婆陁（おさだ）宮治天下天皇	
	（堅塩太皇太后）	の時に生まれた。／吉士詛語彦	
14年（585年）磐余池辺双槻宮	用明天皇	池辺大宮治天下天皇	用明／目
		帝即位（67歳：519年生）	多利思比孤
用明天皇2年（587年）倉梯宮	崇峻天皇	帝即位（66歳：522年生）	↓
崇峻天皇5年（592年）豊浦宮	（磐隈太皇太后）	（壬子：592年）豊浦帝即位	↓
		<田目皇子（豊浦皇子）>	（600年）
推古天皇9年（601年）耳梨行宮		於等由羅宮治天下天皇に仕えた。	崇峻
11年（603年）小墾田宮		（とゆら）	
13年（605年）斑鳩宮	（推古太皇太后）		雄古
29年（621年）			（欽明の孫娘）
30年（622年）			
36年（628年）			
舒明天皇元年（629年）		己丑 帝即位（36歳：594年頃生）	
2年（630年）飛鳥岡本宮	舒明天皇	阿須迦（あすか）宮治天下天皇	舒明
8年（636年）田中宮	（小墾田太皇太后）		
12年（640年）厩坂宮			
12年（640年）百濟大宮			
13年（641年）		阿須迦（あすか）天皇之末	
		歳次辛丑（641年）没	
皇極天皇元年（642年）小墾田宮	皇極天皇	壬寅 帝即位（50歳：593年頃生）	皇極
2年（643年）飛鳥板蓋宮	（皇極太皇太后）		

※「日本書紀の記述を」：系図を眺めるだけで、色々なことを考えてしまいます。同性不婚を考えると「抜き書きした系図」：敏達天皇や、欽明天皇は、複数の人物が混ざっているような気がします。

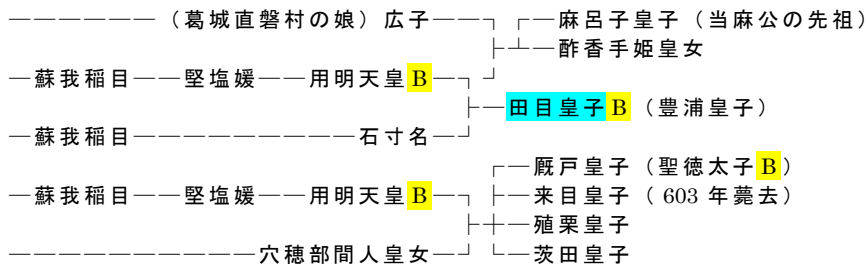


—「古事記」から見た「聖徳太子」：用明天皇の段：—

「弟（おと）、橘豊日王A、池辺宮に坐しまして、天の下治らしめすこと、三歳（みとせ）なりき。この天皇、稻目大臣の女、意富藝多志比売（おほぎたしひめ）に娶（みあ）ひて、生ませる御子、多米（ため）王A（一柱）。また庶妹（ままいも）間人穴太部（はしひとのあなほべ）王に娶（みあ）ひて、生ませる御子、上宮（うへのみや）の厩戸豊聡耳（うまやどのとよとみみ）命A。次に、久米王、殖栗王、茨田王（四柱）。（当麻の倉の首比呂の女）飯之子王に娶（みあ）ひて、生ませる御子、当麻王、須加志呂古郎女。この天皇。（分注、丁未の587年の四月十五日に崩りましき。）御陵は石寸（いわれ）の掖上（わきがみ／いけのうえ）にありしを、後に科長（しなが）の中の陵に遷（うつ）しき」とある。

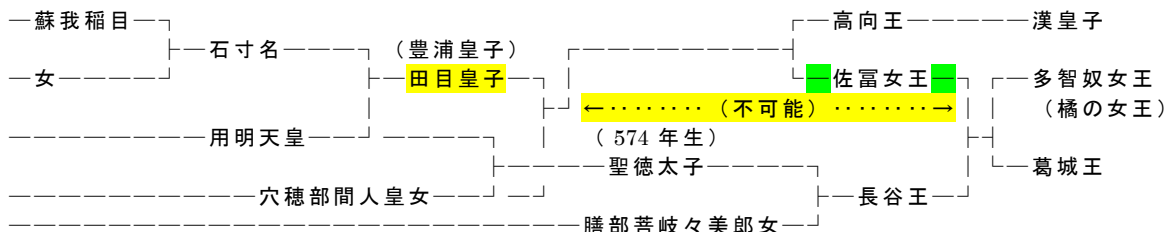


—「日本書紀」から見た「聖徳太子」：—



※：「佐富女王」の（不可思議な）系図から、「系図改ざんの構造」と「系図復元」を考えます。

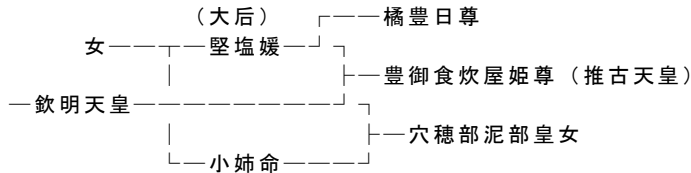
※：（ウィキペディアより）「佐富女王」（さとみのひめみこ／さふのひめみこ、生没年不詳）父は田目皇子、母は穴穂部間人皇女。穴穂部間人皇女は田目皇子の父用明天皇の皇后であり、用明天皇の崩御後に田目皇子と再縁し、「佐富女王」を産んだことになる。聖徳太子の異母兄の娘かつ異父妹にあたる。甥であり、従兄弟に当たる長谷王（聖徳太子と膳部菩岐々美郎女の子）と結婚し、葛城王・多智奴女王を産む。



- <米田の系図解説の基本姿勢>（自作の系図では、前後の人物の、年代的・世代的な関係を見ています。）
- （その1）：男性は60歳でも、子どもを作るけれど、女性の出産可能年齢は、13歳から30歳の間です。
- （その2）：系図にした時に、女性が30歳を超えた高齢出産をしている時には、系図の改ざんを疑います。
- （その3）：後に娘がない時は、第二夫人の娘が宗女として（伊勢大神を祀る祭祀権）跡を継ぎます。
- （その4）：持統天皇の女系の先祖は、「春日山田皇女」か「橘仲皇女」のどちらかである。

———：「天壽國續帳」の銘文（訳文）の登場人物：———

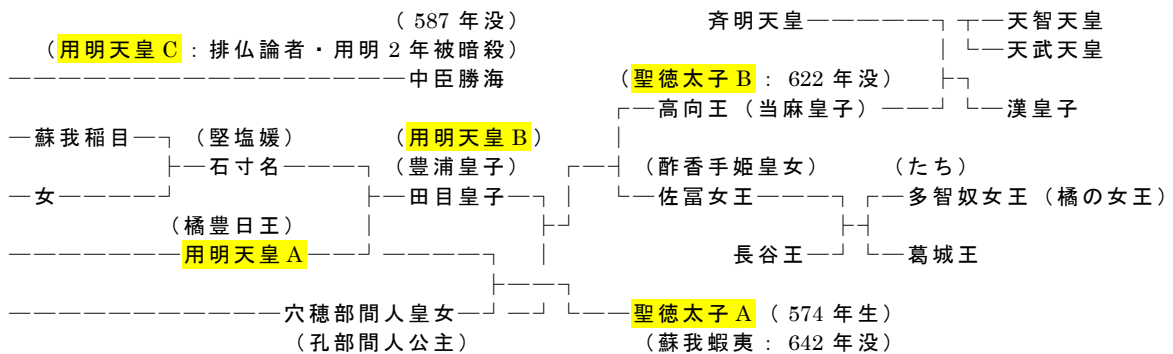
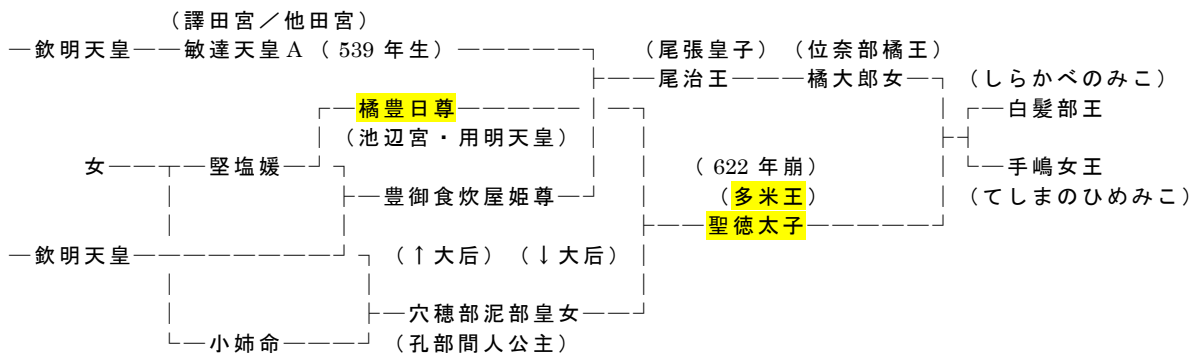
磯城嶋宮に天の下治らしめしし天皇（すめらみこと）、名は 天国排開廣庭尊（＝欽明天皇）、蘇我の大臣稲目の足尼（すくね／宿禰）が娘、名は「堅塩媛」を娶りて**太后**（おおきさき）となし、名は 橘豊日尊（＝用明天皇）の妹（いも）名は 豊御食炊屋姫尊（＝推古天皇）を生みたまいき。また太后が弟（おと）名は 小姉命（おあねのみこと）を后となし、名は 穴穂部泥部皇女（あな ほべはしひとのひめみこ）を生みたまいき。



磯城嶋の天皇が御子、名は 淳中倉太珠敷尊（＝敏達天皇A）、庶妹（ままいも）名は 豊御食炊屋姫尊（とよみけかしきやひめのみこと）を娶りて**太后**となし、おさたの宮（譯田宮／他田宮）に坐（いま）して天の下治らしめしき。名は 尾治王（おはりのみこ）を生みたまいき。

橘豊日尊（＝用明天皇）、庶妹（ままいも）名は 孔部間人公主（あなほべ はしひとのひめみこ）を娶（めと）りて**太后**となし、いけのべの宮（池辺宮）に坐（いま）して天の下治しめしき。名は とよのみみのみこと（豊聰耳皇子＝聖徳太子）を生みたまいき。尾治王がむすめ、名は橘（たちばな＝多智）の大女郎（おおいらつめ）を娶りて 后となしたまう。

壬辰（572年）帝即位（34歳）←（539年生：敏達天皇）『日本帝皇年代記』より、

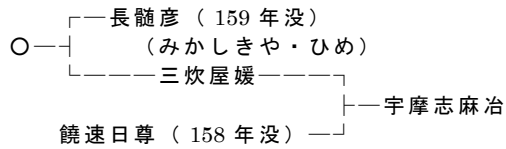


<高句麗王の続柄と、日本書紀の不思議>：（私には、「日本」と「高句麗」が、重なって見えます。）

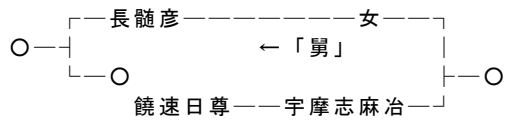
- （その1）：榮留王は、嬰陽王の異母弟である。
- （その2）：宝蔵王は、榮留王の弟である。（642年に、蓋蘇文が榮留王を弑逆し、王位を継がせた。）
- （その3）：661年、日本の高麗を救援する軍將たちが、百済の加巴利（かはり）浜に泊って火を焚いた。
- （その4）：662年、唐人、新羅人が高麗を伐った。高麗は救援を国家に乞うた。
- （その5）：664年、高麗の大臣蓋金〔泉蓋蘇文〕が、その国で〔生を〕終えた。

※：「豊御食炊屋姫命（尊）」（とよみけかしきやひめのみこと）が、個人名ではなく、
 〃：「大神」を祀る「祭祀者」とすると、
 〃：「神武天皇」の時代の、三炊屋姫（御炊屋姫：みかしきや・ひめ）も、個人名では、なくなります。

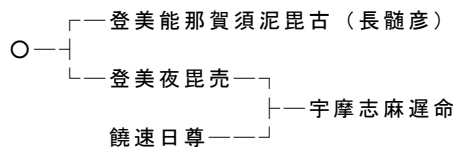
< 神武東征での、饒速日命のエピソードは、すべて作り話である。しかし、系図はすべて正しい。 >



「日本書紀」
 饒速日命は、長髓彦の性質が反抗的で、
 天と人との際を教えてもだめと見て、殺した。
 饒速日命は、その衆をひきつれ帰順した。



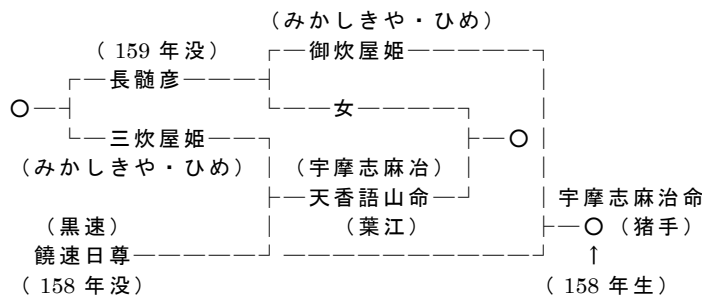
「先代旧事本紀」
 長髓彦は、「天神の御子は二人も居る訳が無い。」
 天孫の軍は連戦したけれども勝事が出来なかった。
 この時、宇摩志麻治命は舅の作戦に従わず、
 帰ってきたところを誅殺した。そして、
 (宇摩志麻治命は) 衆を率いて帰順された。



「古事記」
 登美毘古を殺したのは、神武天皇。邇芸速日命は、
 神武天皇のもとに参上した(帰順した)。
 邇芸速日命が登美毘古の妹の登美夜毘売と
 結婚して生んだ子は宇摩志麻治命である。

神武天皇による東征のモデルとしての、「饒速日尊の天磐船」は、157年にあったと思います。

※：上記三書と「日本書紀(一書)」との合成図



「先代旧事本紀」
 (巻第三 天神本紀／巻第五 天孫本紀)

饒速日尊は天磐船にのって、河内の国の
 河上の哮峰(いかるがのみね)に
 天下った。大倭の国の鳥見の白庭山
 (しらにわのやま)に移った。
 饒速日尊は長髓彦の娘の御炊屋姫を
 娶り、懐妊させた。
 (子どもが)生まれる前に、
 饒速日尊はお亡くなりになった。

◎：『日本書紀』の記述を中心とした時系列。(年代は、『先代旧事本紀』天皇本紀と同じです。)

『日本書紀』(神武天皇紀)

- ： 174年(太歳甲寅：きのえとら)：(神武天皇は、)九州を出発した。
- ： 174年(甲寅)：安芸の国について、「埃(え)の宮」に居た。
- ： 175年(乙卯)：吉備の国に入った。(高島の宮という。3年が云々。：175～177年)
- ： 178年(戊午)：皇軍は、ついに東した。
- ： 179年(己未)：春2月20日、諸将に命じて、士卒を選んだ。橿原に帝宅をつくりはじめた。
- ： 180年(庚申)：正妃をたてた。
- ： 辛酉(かのえとり)：181年)：神武天皇は、橿原の宮で帝位についた。

◎：『先代旧事本紀』巻第七 天皇本紀(神武天皇の章)の年代と登場人物。

- ： 太歳甲寅(きのえとら)：174年)年冬十月五日(辛酉(かのとり))。
- ： 天皇自ら諸皇子を率いて西宮より出発し、船軍を組んで東征に向われた[天孫紀に出ている]。
- ： 己未(つちのとひつじ)：179年)の年春二月某日(庚辰)。道臣命(みちのおみのみこと)は、云々。
- ： 28日。宇摩志麻治命(うましまちのみこと)は天物部(あまのものべ)を率いて、云々。
- ： 辛酉(かのえとり)：181年)年を元年とした。春正月一日(庚辰：かのえたつ)
- ： 橿原に都を造り初めて皇位に登られた。正妃の踏鞴五十鈴媛命を尊んで立てて皇后とした。